
3月11日(2)

(森安章人、SOS! 500人を救え! 3・11 石巻市立病院の5日間、三一書房、p.20)

2014年6月20日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

この文章は、内科部長の筆者が2011年3月11日の石巻市立病院で地震に遭遇した14時46分から津波が到達したときまでの15時46分までにどう行動したかを描いたものである。

1 災害対策本部

筆者はICUを出ると、2階の総務課に向かい、訓練通りに全館放送をした。そして総務課の遠藤に会議室に災害対策本部を作るための準備をするよう言った。石巻市立病院は防災マニュアルを基に各部署の実情に応じた震災行動表を作成、毎月訓練を行ってきた。各部署は行動表に基づいて的確に行動していたため、院内は比較的冷静で、パニックを起こして右往左往する者はいなかった。

2 受け入れ準備

1階外来では災害時緊急患者の受け入れ準備が進んでいた。筆者は玄関近くでトリアージの準備をした。人々の動きは外来患者受け入れの行動表に基づいた、冷静で無駄のない動きだった。総務課の遠藤は各病棟師長が持ってくる情報を項目・部署ごとに、ホワイトボードに記入していた。訓練とは違い、病院幹部5人が市役所に出かけていて、今ここには責任者は誰もいなかった。

3 娘からのメール

15時20分、院長の伊藤と事務次長の鷺見が会議室にやってきた。「病院は海のそばだから、まずいんじゃないかと思って二人で市役所の議場から帰ってきた」「病院のある地区を脱出する車たちとは逆に病院に向かってきた。裏道を通ってやっとたどり着いた」筆者の娘から安否を心配するメールが来ていたので、返信した。

4 緊急避難

病院に隣接する老人ホーム『うさぎの家』から避難受け入れの要請があり、その20人を受け入れることにした。1階のリニアック室が広いので、そこに受け入れた。まもなく15時30分になろうとしていた。

5 1階から3階へ

本部から『上の階に避難するように』という命令があり、少し躊躇したが、『うさぎの家』からリニアック室に受け入れた20人を3階の病棟へ移すよう、外来看護師たちに命じた。15時30分を回ったところだった。看護師たちからは不満の声が聞こえたが、それは無視した。2人の見舞い客が家に帰ろうとしていたので、力尽くで阻止した。2人は不平を言いながらも患者の病室に戻っていった。

6 黒タグ

15時40分、玄関に1台の軽トラックが止まった。運転してきた男性は、「隣の家の女性が玄関で

倒れていたのでは何とかしてほしい」と言って女性を連れてきたのだという。女性は既に死亡していたので黒タグをつけた。取り決め通りにストレッチャーは霊安室に移動された。搬入1件目が黒タグだったので、筆者はこれから次々とやって来るであろう負傷した住民たちのことを思うと、暗い思いになった。

7 「背負って上がれ！」

一旦リニアック室に収容した高齢者のうち、車椅子で運びきれない人たちは、技師や医師や手分けして背負い、3階まで移動させていた。自力歩行の可能な人たちは5階まで階段を上った。しかし、1階のエレベーター前には3階へ運び上げるのを待つ看護師の押す車椅子が並んでいたのもので、これでは間に合わないかもしれない、と思った筆者は、「大至急、力任せに背負って上がるんだ」と指示した。軽トラックを運転してきた男性が帰ろうとしたので、説得してやめさせた。

玄関先に救急車が止まった。中から救急士が出てきて受け入れが大丈夫なのかを確認して、また救急車に戻って出発していった。

8 449人

地震発生時、病院内には医療スタッフが231人、入院患者が152人、見舞客や一般避難者・隣接施設からの避難者など66人の合計449人の人間がいた。健常な避難者のために5階の食堂を解放した。そこには物資が何もなかったのもので、筆者は水、食料などとともに毛布もいきわたるよう手配した。

病院内は地震発生とほぼ同時に自家発電に切り替わったが、ボイラーや機械施設は1階にあり、15時46分、津波襲来とともに水没、機能は完全に停止した。また、CT、MRI、血管造影、内視鏡といった高額医療機器をはじめとしてコンピューターサーバーもあったが、全て破壊され、病院機能は完全に破壊された。

調理室関係も1階にあり、食料の備蓄も壊滅した。

M9、震度7の大地震に持ちこたえた病院に449人の人間が取り残され、ライフラインが途絶えた中、限られた食料と水で生き残らなければならなくなった。

石巻市立病院は、防災マニュアルを基に各部署の実情に応じた震災行動表を作成、毎月訓練を行ってきたために責任者がいない状態でも皆が落ち着いて対処でき、迅速に上の階に避難することができた。しかし、重要な機器やサーバー、備蓄食料が1階にあったため、その後の籠城が困難になった。また、もしもっと津波が早く襲来していれば、1階の人々は津波の犠牲になってしまったかもしれない。我々はこれらの体験を基に、災害に対する訓練を行い、非常時にも臨機応変に迅速に対応できるようにしておく必要がある。